

金ヶ崎周辺整備構想【概要版】

～ 敦賀ノスタルジアム ～



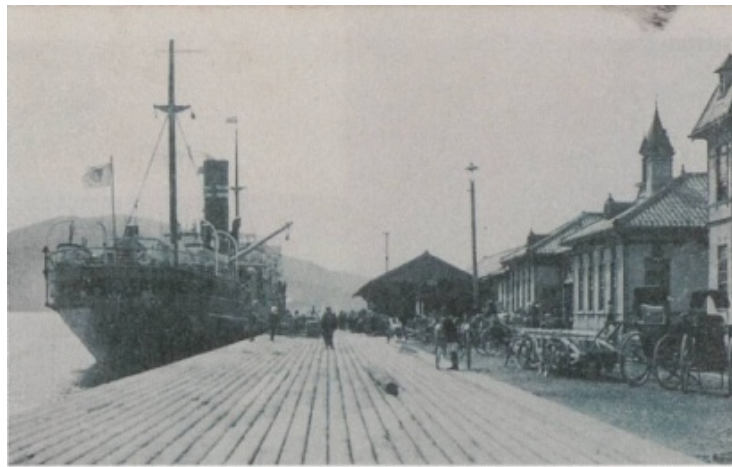


金ヶ崎周辺整備構想 将来イメージ図

往時の史実分析

海路と陸路の中継地点、東洋の波止場（オリエンタルワーフ）と呼ばれていた鉄道棧橋周辺にドラマが生まれ、現存する赤レンガ倉庫、ランプ小屋、線路が歴史を今に伝えていることから、これらの資源や史実を郷土に対する愛着や誇りの醸成、多様な交流による地域活性化に活かします。

○埠頭、棧橋まで鉄道が伸び、駅だけでなく、税関や商船会社の洋風建築物が建ち並んでいました。

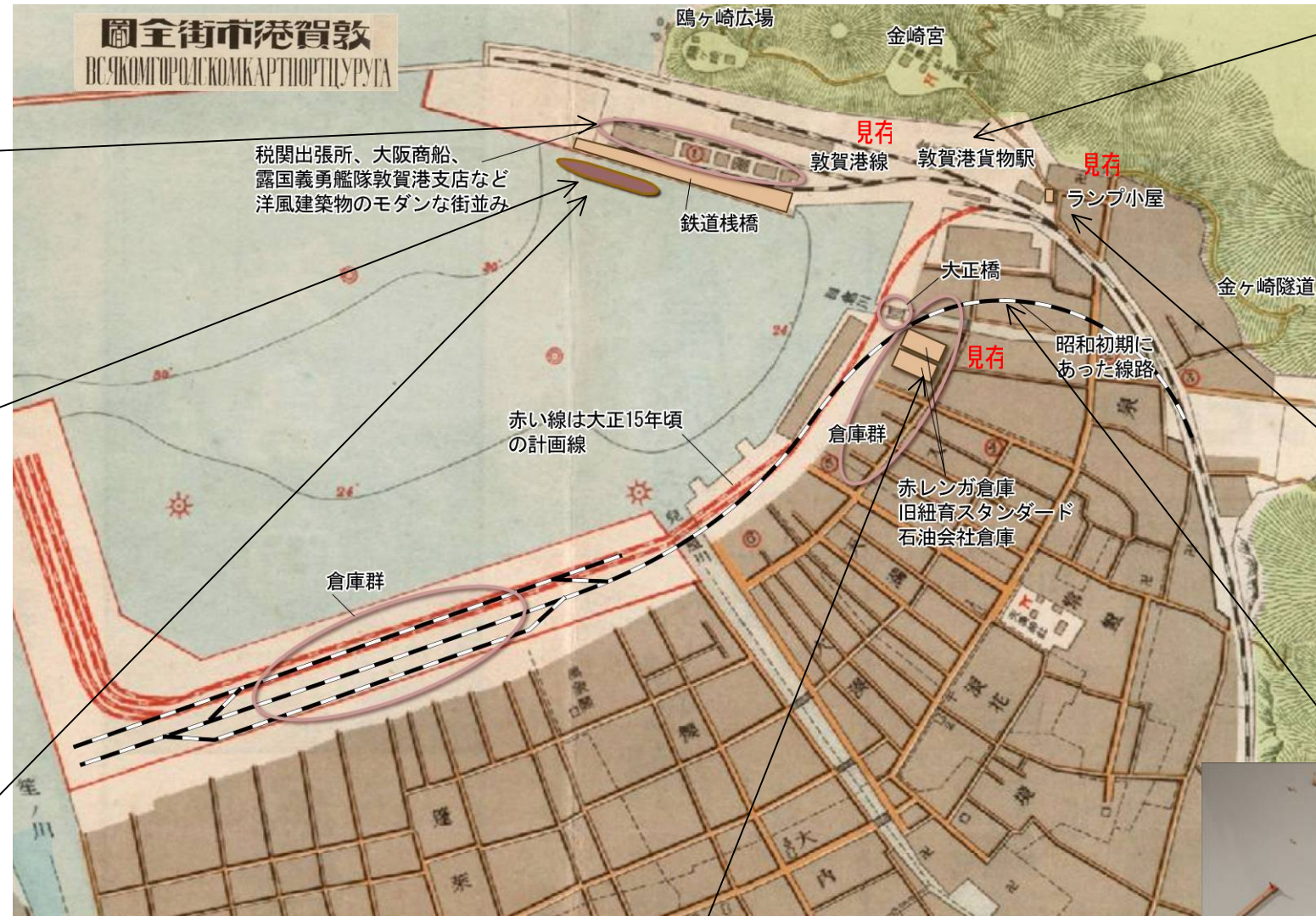


○金ヶ崎周辺は欧州からアジアへの玄関口であり、埠頭、鉄道棧橋は多くの人々がそれぞれの胸に様々な想いを抱きながら行き交いました。



○シベリアに残されたポーランド孤児やユダヤ人難民たちも金ヶ崎周辺を入口にして日本へと逃れてきました。当時の敦賀の人々の彼らに対する思いやりのあるもてなしの様子など心温まる物語が伝えられています。

○その中の一つとして、少年がりんごなど沢山の果物が入った籠を置いて行った逸話は、敦賀港駅近くでのエピソードとして伝えられています。



○休止中の線路は、港と鉄道で栄えた金ヶ崎周辺の歴史を今に伝える遺構です。



○ランプ小屋は100年以上前から列車の運行に欠かせない施設としてこの地に建っている貴重な近代化遺産です。



○敦賀港からは人だけでなく多くの物資が入り出ており、港周辺には倉庫が建ち並んでいました。

○旧紐育スタンダード石油会社の赤レンガ倉庫は、その中でも大きなもので、当時、金ヶ崎周辺に上陸した人々が見た風景を形作った建造物であり、当時の人々と現代の我々をつなぐ重要な資源です。



○昭和初期には赤レンガ倉庫前を通る支線「敦賀新港線」がありました。

金ヶ崎周辺整備の考え方と方向性

金ヶ崎周辺整備の考え方

(1) 市民の願いである居心地の良い空間づくり

ア) 平成24年(2012年)を契機とした市民への周知

平成24年(2012年)は、敦賀一長浜間鉄道開通130周年、敦賀一ウラジオストク定期航路開設110周年、欧亜国際連絡列車運行100周年に当たる年であり、鉄道と港の歴史を市民皆で振り返り、未来へとつなげる格好のタイミングです。
記念事業などのイベントをきっかけにして、より多くの市民に金ヶ崎周辺の歴史や港が持つ特有の「のどかさ」や「異国情緒」などの魅力を体感していただき、日常的に金ヶ崎周辺に足を運ぶ市民の増加につなげます。

イ) 市民意向の反映

(市民シンポジウムのアンケート結果から)

市民シンポジウムに併せたアンケート調査結果では、回答者の93%の方が、敦賀市にとって金ヶ崎周辺の資源や歴史を活かした活性化が重要であると回答され、また、金ヶ崎周辺のまちづくりについて、特に実現すべき事柄としては、飲食機能の導入と回答される方が最も多く、次いで赤レンガ倉庫の活用、修復、耐震化と金ヶ崎緑地の充実が同数でした。
市民が親しめる憩いの場とするためにも、また、金ヶ崎周辺のまちづくりに市民の積極的な参画を促進するためにも、市民の意向を十分に反映しながら整備を進めるとともに、積極的な情報発信に取り組めます。

ウ) 後世にも守り伝えていく持続的なまちづくり

市民が金ヶ崎周辺で豊かに時間を過ごす機会が増え、市民の力で金ヶ崎周辺をさらに快適な空間にしていくことにより、やがて、遠方からより多くの観光客を呼び込むことにつながります。今も価値を失っていない赤レンガ倉庫のように、後世にも大切にされる質の高いまちづくりを目指し、時代によって変化する要請に応えながら、じっくりと持続的に取り組めます。

(2) 恵まれた地域資源の活用

ア) 赤レンガ倉庫などの既存の資源の活用

金ヶ崎周辺には、鉄道と港の歴史を今に伝える資源として「赤レンガ倉庫」、「ランプ小屋」、「休止中の線路」などが残されています。
これらの資源は、地域の発展の歴史を伝える建造物としてまちづくりに活用されるべきものですが、現在、これらは十分に活用されているとは言えない状態です。今後、これらの資源を適切に保全し、積極的に活用することが重要です。

イ) 「人道の港」にまつわる数々の物語の活用

「鉄道」と「港」の歴史を振り返る時、欠かすことのできないエピソードとしてポーランド孤児やユダヤ人難民を受け入れた「人道の港」の物語があります。先人達が示した博愛精神を伝え継いでいくためにも、この誇らしい物語をまちづくりに活かすことが重要です。

ウ) 海や山などの自然、中世の歴史資源等の活用

金ヶ崎周辺は、天然の良港敦賀湾に面しており、海辺に立てば、穏やかでどかな雰囲気を感じることができます。また、北側には緑豊かな天筒山があり、桜の名所金崎宮や金ヶ崎城跡などの中世時代を中心とした歴史資源を遊歩道で巡ることができます。
これらの資源について、鉄道と港に関するまちづくり資源と相互に結びつけ活用することが重要です。

(3) テーマは「鉄道」と「港」により

発展した明治後期～昭和初期頃の時代

敦賀の発展の歴史は、「鉄道」と「港」を抜きにして語ることはできません。鉄道と港により敦賀は世界とつながり、多くの人やモノが行き交いました。特に明治35年の敦賀一ウラジオストク定期航路開設と明治45年の欧亜国際連絡列車の運行開始によって、敦賀は欧州に向けたアジアの玄関口となり、発展することとなりました。
明治後期～昭和初期こそが、金ヶ崎周辺が最も賑わい、敦賀の近代発展に決定的な役割を果たした時代であり、金ヶ崎周辺整備に際してこの時代を強く意識することが重要です。

(4) 民間活力の導入による賑わい創出促進

明治後期～昭和初期頃の金ヶ崎周辺の雰囲気将来にわたって伝え継ぐためには、現在残されている資源の保全、活用だけでなく往時のモダンな街並みを体感できるようにすることが考えられます。
また、飲食機能や物販機能の導入も憩いや交流を促進する上で重要な要素となります。これらは、民間事業者の活力や経営ノウハウの導入により実現を図るべきものであり、民間事業者が参入しやすい環境づくりが重要となります。

全体コンセプト

～敦賀ノスタルジアム～

金ヶ崎周辺には、敦賀市の最も輝かしい時代の遺構やエピソードがあることから、未来に向けて市民が誇りを持って歴史をつないでいくため、先人が残した資源の保全や復元、エピソードをモチーフとしたまちづくりを進めます。

ノスタルジアム

ノスタルジー・・・明治後期～昭和初期の最も輝かしい時代の敦賀港の雰囲気を感じ取ることができ、市民の郷土への愛着、誇りを醸成したり、市民や観光客が異国情緒を味わうことができる空間
単に過去を懐かしむだけでなく、現代に残る貴重な資源を未来に引き継ぐことを感じ取れる空間

ミュージアム・・・港と鉄道に関する歴史を中心に多様な資源がある金ヶ崎周辺全体を博物館に見立て、後世に史実を正しく伝え、市民や観光客の知的好奇心を満たすことができる空間

●「アジアとヨーロッパを結ぶ港」として活気にあふれ、また「人道の港」として博愛精神にあふれていた、明治後期～昭和初期の敦賀港と鉄道の歴史を後世に残し、広く市民や観光客に伝える場とします。

●特に「人道の港 敦賀」として、当時ポーランド孤児やユダヤ人難民の救済に向けて善意の手を差し伸べた市民の精神を受け継ぐべく、「おもてなしの心」で観光客を温かく迎えます。

金ヶ崎周辺整備の方向性

●金ヶ崎周辺の最も輝かしい時代、そして人道の港敦賀を象徴する場所
歴史のロマンや後世に誇るべき博愛の精神を感じ、伝え継ぐのに最もふさわしい場所

古き良き時代を感じるゾーン

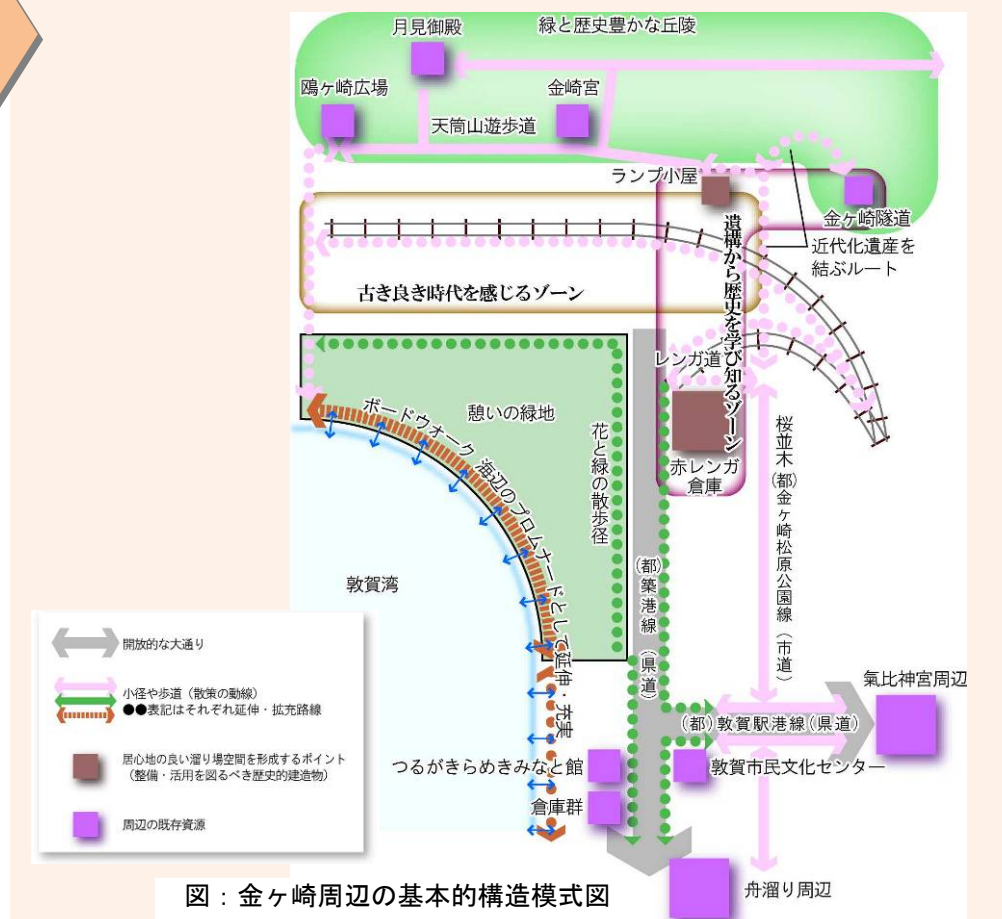
【かつて鉄道棧橋であった区域
—プラットホーム～乗降船場】

●明治後期～昭和初期にかけての建築物や遺構で現存しているもの

まちの移り変わりを見続けてきた建物等の雰囲気や歴史を保全しながら、歴史を伝え継ぐ施設として活用

遺構から歴史を学び知るゾーン

【赤レンガ倉庫、ランプ小屋、線路等】



フェーズ1
今ある資源を
活かしてできる
ところから

フェーズ2：市民憩いのガーデンスペース

民間事業者等の用地の活用について調整が整った段階で着手

現存する歴史的建造物など往時の雰囲気を感じさせる資源を磨き、さらに価値を高めるとともに、港が持つ独特ののどかさを堪能できる環境づくりや花と緑で彩られた快適な回遊空間のネットワーク化を進め、魅力的な広場・公園を創出します。

考え方

プラットホームの復元やかつて線路があった場所の明示、ポーランド孤児やユダヤ人難民が降り立った地点の明示、リンゴのエピソードなど数々のドラマに因んだ空間演出を金ヶ崎周辺にちりばめ、市民や観光客が往時への想いを馳せながら快適に散策できる回遊ネットワークを形成します。

特徴

市民や観光客自らが想像力を活性化させることによってワクワク感を味わうことができたり、今の風景と往時の風景イメージを想像の中で重ね合わせるにより、永い時間の流れをより実感できたりするなど、知的好奇心を満足させます。
緑豊かな公園を基調とした整備を行い、現代の街並み、風景とも違和感のない空間整備を進めます。



写真：楽しく歩ける回遊空間



写真：金ヶ崎緑地や後背丘陵地と一体となった緑豊かな公園を基調とした整備



写真：かつてのレール位置を明示



写真：かつての建造物の基礎を復元



写真：かつてのプラットホームを復元

フェーズ3：敦賀ノスタルジアムワーフ

金ヶ崎周辺に一定の賑わいが創出された段階で民間活力主体による整備を期待

波止場や駅舎など、往時の雰囲気を象徴する建造物等を復元することによって、いわばノスタルジアムタウンを新設し、敦賀に異国情緒あふれる新たな出会いと交流の核となる拠点を創出します。

考え方

波止場や駅舎など、プラットホームを中心とした港敦賀の繁栄を象徴するエリアを核として、往時の雰囲気をそのままに街並みの一部を復元することで、市民や観光客に直接的に五感でノスタルジーを感じさせる空間デザインとします。

特徴

具体的に目に映り、手に触れる形で街並みを復元するため、往時の雰囲気が分かりやすく、伝わりやすいものになります。復元することにより特徴的な街並みが形成されるため、その一角は周辺の風景とは趣が異なり市民や観光客の目を引く名所となります。
建物内部などを展示や交流、飲食・物販機能などの空間として活用することができます。



写真：金ヶ崎周辺の往時の街並み



写真：金ヶ崎周辺の往時の街並み



写真：金ヶ崎周辺の往時の街並み



写真：復元による街並み創出イメージ



写真：復元による街並み創出イメージ